

《研究ノート》

島嶼集落における社会的かかわり状況と見守り、防災、  
医療体制について

— 奄美市住用町における中高年者調査から —

小窪 輝吉・岩崎 房子・大山 朝子  
田中 安平・田畑 洋一・高山 忠雄

# 島嶼集落における社会的かかわり状況と見守り、 防災、医療体制について

— 奄美市住用町における中高年者調査から —

小窪 輝吉・岩崎 房子・大山 朝子  
田中 安平・田畑 洋一・高山 忠雄

要旨：本研究の目的は奄美市住用町における中高年者の社会的かかわり状況と、見守り体制、災害への備え、医療体制などの現状と課題をアンケート調査により把握し、地域課題の改善に役立てることである。郵送調査により、55歳以上74歳以下の476人を調査対象とし、175人から回答を得た（回収率36.8%）。

回答者は夫婦世帯が多く、世帯収入は年金が多かった。地域の交流は少し減ってきていたが、地域への愛着は高かった。家族との交流、近所づき合い、相談相手、役割などは女性の方が男性よりも良好であった。見守りは自然な形でなされていたが、見守り体制作りへの要求もあった。集落の防災組織はうまく機能しているが、避難所の確保や水害対策などに課題を残していた。医療体制については診療所への肯定的評価がある一方、緊急医療や専門医療への要望が強かった。地域の課題では買い物不便とか自然災害に弱いなど社会的・自然的課題があった。

キーワード：島嶼集落、社会的かかわり、見守り体制、防災体制、医療体制

## 目的

本稿の目的は、島嶼集落における中高年者の日常の社会的かかわり状況と、見守り体制、災害への備え、医療体制などの現状と課題をアンケート調査により把握し、地域課題の改善に役立てることである。

調査対象地である奄美市住用町は、奄美市名瀬の南に位置し太平洋に面している。住用村は2006（平成18）年に名瀬市・笠利町と合併し奄美市となり住用町となった。住用町の人口は、村時代の1927（昭和2）年の5,611人をピークに戦後を通じて減少傾向を示してきた（住用村誌編集委員会、2005）。最近の国勢調査によると、2000（平成12）年には1,921人、2005（平成17）年には1,784人、2010（平成22）年には1,544人、2015（平成27）年には1,359人と人口減が続いている。2016（平成28）年現在の人口は1,331人で、そのうち前期高齢者は194人（14.6%）、後期高齢者は340人（25.5%）であり、高齢化率は40.1%となっている（奄美市HP、2016）。

住用町には嘱託員を置いている集落が14あり、太平洋に面した海岸線沿いと内陸部に点在している。奄美市の名瀬から国道58号線で住用町に入ると海辺に出たところに和瀬集落があり、右に折れて短いトンネルを過ぎたところに城集落がある。左手に見える内海という丸い形の湾沿いに摺勝集落と美里集落があり、さらに国道58号線を進み長いトンネルを過ぎたところに西仲間集落がある。この集落には旧住用村役場があった。今は奄美市役所住用総合支所となっている。住用町には川内川、住用川、役勝川の3つの大きな川があり、その一つ

川内川は内海にそそいでいる。川内川を上流に進むと東仲間集落と川内集落がある。西仲間集落は住用川沿いにあり、国道58号線から降りて住用川の河口に向かったところに石原集落がある。役勝川と住用川が合流する河口にはマングローブの森が広がっているが、そこを過ぎたところで国道58号線を降りて左に進むと山間湾沿いに山間集落、戸玉集落、市集落がある。一方、西仲間集落から役勝川に沿って国道58線を瀬戸内町に向かうと、下役勝集落、中役勝集落、上役勝集落があり、その先に瀬戸内町と宇検村への分岐点がある。

農業は、稲作が盛んであったが、1977（昭和52）年以降、水田の畑地への転換が進められほとんどなくなった。また、かつて盛んだったサトウキビも1970年代にボンカン・実えんどう・にんにく等への転作が進められほとんど作られなくなった。現在はボンカン、タンカン、パッションフルーツなどの果樹と野菜中心の農業になっている。林業は1969（昭和44）年にチップ工場ができたが、それも1996（平成7）年には閉鎖になった。漁業は山間、戸玉、市などの海岸沿いの集落で続けられている。（住用村誌編集委員会、2005）。

住用町は2010（平成22）年10月の奄美豪雨災害で河川氾濫や土砂崩れで情報伝達を含めたライフラインや公共施設等が壊滅的被害を受け、集落が孤立した経験を持つ。その際地域の住民がお互いに助け合い高齢者を含む地域住民の犠牲を抑えたと言われている。また、災害を経験して自主防災組織を立ち上げ防災・減災に力を入れてきているところでもある（奄美市、2015）。

本稿は奄美市住用町で実施した中高年者の日常生活実態調査の結果を集計分析することで、離島集落の住民の日常行動や見守り支援・防災への取り組みなどの現状と課題を整理することを試みる。

## 方法

本調査は、奄美市住用町にお住まいの55歳から74歳の中高年者を対象に「生活と福祉に関する意見」を調べるために実施したものである。調査方法は郵送調査であった。

調査対象者は奄美市住用町にお住まいの55歳から74歳の男女476人で、そのうち175人から回答を得た（回収率36.8%）。調査内容は、普段の生活状況、見守り体制、災害への備え、医療体制、地域の課題などであった。調査時期は2014（平成26）年1月から3月であった。なお、質問項目への無回答があるため、回答結果の集計における回答者数は質問項目ごとに異なる。

倫理的配慮について、調査用紙に調査の趣旨とともに、回答は自由意志であり、拒否しても不利益を被ることがないこと、調査は無記名で、個人が特定できないよう統計処理をすることを説明した文書を添付した。また、本調査は所属大学の研究教育倫理審査委員会の承認を得たうえで実施した。

なお、本報告の集計では、回答者の年代と各質問項目のクロス集計を中心に行った。その際、55歳以上64歳以下を「中年後期」、65歳以上74歳以下を「高年前期」と2つに分けた。

## 結果

### 1. 回答者の属性

#### (1) 性と年齢

性別の平均年齢は、男性が64.2歳（SD=.606, n=87）、女性が64.5歳（SD=.607, n=83）で性差は見られなかった。性と年齢の両方に答えた方は169人であった。年齢について55歳以上64歳以下を「中年後期」、65歳以上74歳以下を「高年前期」として分類して、性とのクロス集計を行った。結果、性別では、男性が51.5%（87人）、女性が48.5%（82人）であり、男女ほぼ同数であった。年齢では、「中年後期」は56.8%（96人）、「高年前期」は43.2%（73人）であり、「中年後期」の割合がやや多かった。性と年齢の関連性は見られなかった。

#### (2) 居住年数

住用町内での居住年数について、回答者167人の平均は28年2カ月であった。これに男女差は見られなかった。対象者は55歳以上なのでかなり多くの方々の方が町外で生活してきていると推察される。年齢から住用町内の居住

年数を差し引いて住用町外での居住年数を求めたところ、平均は36年5ヶ月であった。これにも男女差は見られなかった。回答者165人のうち、住用町に居住し続けて町外に居住したことがない方は11人(0.07%)、50年以上町外に居住していた方は55人(33.3%)であった。

中にはUターン者もいると思われるが、ほとんどの人がいったん町外に出て生活し、それからUターンしていると思われる。

### (3) 健康状態

健康状態を「健康である」から「健康でない」の4段階で答えてもらった。

全体では回答者171人のうち、「健康である」が35.7% (61人)、「まあまあ健康である」が48.5% (83人)、「あまり健康でない」が12.3% (21人)、「健康ではない」が3.5% (6人)であり、「まあまあ健康である」人が最も多かった。「健康である」と「まあまあ健康である」を合わせて「健康」、「あまり健康ではない」と「健康ではない」を合わせて「病弱」と2つに分類した。結果、「健康」は84.2% (144人)、「病弱」は15.8% (27人)となり、健康状態が良い人の割合が高かった。

年齢による健康状態の違いは見られなかった。

### (4) 世帯状況

全体では回答者169人のうち、「一人暮らし」が14.2% (24人)、「夫婦のみ」が55.6% (94人)、「子供と同居(二世帯同居)」が15.4% (26人)、「子供と孫と同居(三世帯同居)」が2.4% (4人)、「その他」が12.4% (21人)であり、「夫婦のみ」の世帯が最も多く半数を超えていた。2番目に多いのが「子供と同居」、3番目に多いのが「一人暮らし」であった。

年齢別に見ると、「中年後期」は「後年前期」よりも「一人暮らし」が多く、「後年前期」は「中年後期」よりも「夫婦のみ」と「子供との同居(二世帯同居)世帯」が多い傾向が見られた。

### (5) 世帯の主な収入

全体では回答者163人のうち、「常勤の仕事の収入」が25.8% (42人)、「臨時の仕事の収入」が10.4% (17人)、「年金などの収入」が57.7% (94人)、「その他」が6.1% (10人)であり、「年金などの収入」が最も多く回答者の半数を越えた。年齢別では、「中年後期」では「常勤の仕事の収入」と「年金など」が多く、「高年前期」は「年金など」がほとんどであった。

## 2. 近隣交流の変化

近隣交流の変化について、「非常に増えてきた」に5点、「少し増えてきた」に4点、「増減に変わりはない」に3点、「少し減ってきた」に2点、「非常に減ってきた」に1点を割り当てて得点化した。全体の平均得点は2.5 (SD=1.059)であり、これは「増減に変わりはない(3点)」より低い値であり、近隣の交流が少し減ってきていることを示している。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、有意差は見られなかった。

また、回答者168人のうち、近隣交流が「非常に増えてきた」と答えたのが4.2% (7人)、「少し増えてきた」が10.1% (17人)、「増減に変わりはない」が32.7% (55人)、「少し減ってきた」が32.1% (54人)、「非常に減ってきた」が20.8% (35人)であった。近隣交流が「減ってきた」と答える方が多かった。

## 3. 地域への愛着度

「あなたは現在お住いの集落・地域にどの程度愛着をもっていますか。」と質問し、「とても」から「ほとんどない」の4段階で評価してもらった。回答者165人の平均値は3.4 (SD=0.678)であり、地域への愛着度は「まあまあ」と「とても」の間にあり、高かった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、有意差は見られなかった。地域への愛着度と住用町内での居住の長さの間の相関係数は0.187 ( $p<.05$ )であり、住用町外での居住の長さとの間の相関係数は-0.196 ( $p<.05$ )であった。これは、男女あるいは年齢と地域への愛着度の間には関連はなく、住用町内での生活が長い人ほど地域への愛着が強く、住用町外での生活が長い人ほど地域への愛着が薄いことを示している。

#### 4. 日常生活状況について（社会関連性指標）

日常生活状況を調べるために、安梅（2000）の社会関連性指標の質問項目を用いた。社会関連性指標は、「地域社会の中での人間関係の有無、環境とのかかわりの頻度などにより測定される、人間と環境とのかかわりの質的、量的側面を測定する指標」である。

それぞれの質問項目に応じて「ほぼ毎日」～「月1度以下」、「いつもある」～「特にない」、あるいは「とても」～「・・・しない」の4段階で答えてもらった。本報告では、安梅（2000）と異なり、集計のために、「ほぼ毎日」を4点、「週2度くらい」を3点、「週1度くらい」を2点、「月1度以下」を1点として得点化した。他の質問項目への回答も頻度や程度が高いほど点数が高くなるように得点化した。最も頻度や程度が高いのが4点、最も頻度や程度が低いのが1点になる。

それぞれの項目について得点化し、性と年齢の2要因分散分析を実施した。結果を表1に示す。

##### （1）家族・親戚と話をする頻度

「家族・親戚と話をする機会はどのくらいありますか。」と質問した。回答者166人の平均値は3.6点（SD=0.850）であり、家族・親戚と話を頻繁にしていた。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、女性（M=3.7）の方が男性（M=3.4）よりも家族・親戚話をする機会が多いと答える傾向が見られた（ $F(1,162)=3.419, p<.10$ ）。

##### （2）家族・親戚以外と話をする頻度

「家族・親戚以外の方と話をする機会はどのくらいありますか。」と質問した。回答者168人の平均値は3.3点（SD=0.942）であり、家族・親戚以外の方と話をまあまあ頻繁にしていた。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、有意差は見られなかった。

##### （3）訪ね合いの機会

「誰かが訪ねてきたり、訪ねて行ったりする機会はどのくらいありますか。」と質問した。回答者163人の平均値は3.0点（SD=0.903）であり、訪ね合う機会は週2度くらいであった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、性と年齢の主効果は有意でなかったが、交互作用が有意であった（ $F(1,159)=4.01, p<.05$ ）。「高年前期」では性差は見られないが、「中年後期」の男性の訪ね合いの頻度が女性より低い傾向が見られた。

##### （4）公民館活動への参加

「地区会、センター、公民館活動に参加する機会はどのくらいありますか。」と質問した。

回答者158人の平均値は1.7点（SD=0.635）であり、公民館活動に参加する機会は月1度に満たない程度で少なかった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、有意差は見られなかった。

##### （5）テレビ視聴

「テレビを見ますか。」と質問した。回答者167人の平均値は3.8点（SD=0.685）であり、テレビを見るのはほぼ毎日に近かった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、有意差は見られなかった。

##### （6）新聞購読

「新聞を読みますか。」と質問した。回答者168人の平均値は3.7点（SD=0.820）であり、新聞を読むのはほぼ毎日に近かった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、有意差は見られなかった。

##### （7）読書

「本・雑誌を読みますか。」と質問した。回答者166人の平均値は2.3点（SD=1.174）であり、本・雑誌を読むのは週1度くらいに近かった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、有意差は見られなかった。

##### （8）役割

「職業や家事など何か決まった役割がありますか。」と質問した。回答者165人の平均値は3.3点（SD=1.161）であり、職業や家事などの役割はときどきより多かった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、性の主効果が有意であり（ $F(1,165)=20.23, p<.01$ ）、女性の方が男性よりも役割があると答えていた。

##### （9）相談者

「困った時に相談に乗ってくれる方がいますか。」と質問した。回答者162人の平均値は3.3点（SD=1.080）で

あり、相談に乗ってくれる方はときどきより多かった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、性の主効果が有意であった ( $F(1,158) = 8.61, p < .01$ )。女性の方が男性よりも相談者がいる人が多かった。

#### (10) 緊急時の援助者

「緊急時に手助けをしてくれる方がいますか。」と質問した。回答者166人の平均値は3.4点 (SD=1.045) であり、緊急時に手助けをしてくれる方はときどきより多かった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、有意差は見られなかった。

#### (11) 近所づきあい

「近所づきあいはどの程度していますか。」と質問した。回答者165人の平均値は3.0点 (SD=0.855) であり、近所づきあいの程度は立ち話程度であった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、性の主効果が有意であり ( $F(1,161) = 7.28, p < .01$ )、女性の方が男性よりも近所づきあいが深いと答えていた。

#### (12) 趣味

「趣味などを楽しむ方ですか。」と質問した。回答者166人の平均値は3.0点 (SD=0.894) であり、趣味をまあ楽しんでいた。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、有意差は見られなかった。

#### (13) 便利な道具の利用

「ビデオなど便利な道具を利用する方ですか。」と質問した。回答者166人の平均値は2.7点 (SD=1.043) であり、ビデオなどの便利な道具の利用はまあまあというよりは低いが少しは利用していた。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、主効果に有意差は見られなかったが、交互作用に傾向が見られた ( $F(1,162) = 3.15, p < .10$ )。女性の場合、「高年前期」の方が「中年前期」よりもビデオ等の利用が低かった。

#### (14) 健康配慮

「健康には気を配る方ですか。」と質問した。回答者166人の平均値は3.2点 (SD=0.694) であり、健康への配慮はまあまあであった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、有意差は見られなかった。

#### (15) 規則的生活

「生活は規則的ですか。」と質問した。回答者166人の平均値は3.2点 (SD=0.674) であり、規則的な生活はまあまあであった。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、年齢の主効果が有意であり ( $F(1,162) = 4.07, p < .05$ )、「高年前期」の方が「中年後期」よりも規則的な生活を送っていた。

#### (16) 生活の工夫

「生活の仕方を自分なりに工夫していますか。」と質問した。回答者165人の平均値は3.1点 (SD=0.687) であり、生活の仕方をまあまあ工夫していた。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、主効果に有意差は見られなかったが、交互作用に傾向が見られた ( $F(1,161) = 3.64, p < .10$ )。「中年後期」では、女性の方が男性よりも生活の仕方を自分なりに工夫していた。

#### (17) 積極性

「物事に積極的に取り組むほうですか。」と質問した。回答者165人の平均値は3.1点 (SD=0.723) であり、物事にまあまあ積極的に取り組んでいた。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、主効果に有意差は見られなかったが、交互作用に傾向が見られた ( $F(1,161) = 2.88, p < .10$ )。「中年後期」では、女性の方が男性よりも積極性が高かった。

#### (18) 社会への貢献の見通し

「自分は社会になにか役に立つことができると思いますか。」と質問した。回答者166人の平均値は2.9点 (SD=0.801) であり、社会にまあまあ役立つことができると思っていた。性と年齢の2要因分散分析を実施した結果、年齢の主効果が有意であり ( $F(1,162) = 6.21, p < .05$ )、「中年後期」の方が「高年前期」よりも社会に役立つことができると思っていた。

表1 日常生活状況の諸側面における社会的関わりの程度

		平均値	標準偏差	主効果	交互作用	
1. 家族・親戚と話をする機会はどのくらいありますか	性	男性	3.4	.952	$p < .10$ 男性 < 女性	n.s.
		女性	3.7	.708		
	年齢	中年後期	3.5	.925	n.s.	
高年前期		3.6	.742			
2. 家族・親戚以外の方と話をする機会はどのくらいありますか	性	男性	3.2	.997	n.s.	n.s.
		女性	3.3	.883		
	年齢	中年後期	3.3	.992	n.s.	
高年前期		3.3	.879			
3. 誰かが訪ねてきたり、訪ねて行ったりする機会はどのくらいありますか	性	男性	2.9	.923	n.s.	$p < .05$ 中年後期の男性が低い
		女性	3.1	.879		
	年齢	中年後期	2.9	.917	n.s.	
高年前期		3.1	.881			
4. 地区会・センター・公民館活動に参加する機会はどのくらいありますか	性	男性	1.6	.603	n.s.	n.s.
		女性	1.7	.667		
	年齢	中年後期	1.6	.632	n.s.	
高年前期		1.8	.632			
5. テレビを見ますか	性	男性	3.8	.778	n.s.	n.s.
		女性	3.9	.570		
	年齢	中年後期	3.8	.791	n.s.	
高年前期		3.9	.450			
6. 新聞を読みますか	性	男性	3.7	.878	n.s.	n.s.
		女性	3.7	.758		
	年齢	中年後期	3.7	.832	n.s.	
高年前期		3.7	.809			
7. 本・雑誌を読みますか	性	男性	2.2	1.163	n.s.	n.s.
		女性	2.5	1.175		
	年齢	中年後期	2.4	1.178	n.s.	
高年前期		2.2	1.169			
8. 職業や家事など何か決まった役割がありますか	性	男性	2.9	1.230	$p < .01$ 男性 < 女性	n.s.
		女性	3.7	.816		
	年齢	中年後期	3.4	1.107	n.s.	
高年前期		3.2	1.233			
9. 困ったときに相談に乗ってくれる方がいますか	性	男性	3.1	1.184	$p < .01$ 男性 < 女性	n.s.
		女性	3.6	.882		
	年齢	中年後期	3.4	1.027	n.s.	
高年前期		3.2	1.148			
10. 緊急時に手助けをしてくれる方がいますか	性	男性	3.3	1.084	n.s.	n.s.
		女性	3.5	.998		
	年齢	中年後期	3.4	1.048	n.s.	
高年前期		3.4	1.049			
11. 近所つきあいはどの程度しますか	性	男性	2.8	.865	$p < .01$ 男性 < 女性	n.s.
		女性	3.2	.808		
	年齢	中年後期	2.9	.896	n.s.	
高年前期		3.0	.802			
12. 趣味などを楽しむ方ですか	性	男性	3.0	.893	n.s.	n.s.
		女性	3.1	.891		
	年齢	中年後期	3.1	.831	n.s.	
高年前期		2.9	.969			
13. ビデオなど便利な道具を利用する方ですか	性	男性	2.7	.989	n.s.	$p < .10$ 女性で中年後期 > 高年前期
		女性	2.7	1.104		
	年齢	中年後期	2.8	1.059	n.s.	
高年前期		2.5	1.012			
14. 健康には気を配る方ですか	性	男性	3.1	.700	n.s.	n.s.
		女性	3.3	.683		
	年齢	中年後期	3.1	.714	n.s.	
高年前期		3.3	.663			
15. 生活は規則的ですか	性	男性	3.1	.689	n.s.	n.s.
		女性	3.3	.656		
	年齢	中年後期	3.1	.666	$p < .05$ 中年後期 < 高年前期	
高年前期		3.3	.672			
16. 生活の仕方を自分なりに工夫していますか	性	男性	3.0	.694	n.s.	$p < .10$ 中年前期で男性 < 女性
		女性	3.1	.679		
	年齢	中年後期	3.1	.662	n.s.	
高年前期		3.1	.724			
17. 物事に積極的に取り組む方ですか	性	男性	3.0	.701	n.s.	$p < .10$ 中年前期で男性 < 女性
		女性	3.1	.747		
	年齢	中年後期	3.1	.676	n.s.	
高年前期		3.1	.786			
18. 自分は社会になにか役にたつことができると感じますか	性	男性	2.9	.777	n.s.	n.s.
		女性	2.8	.828		
	年齢	中年後期	3.0	.707	$p < .05$ 中年後期 > 高年前期	
高年前期		2.7	.888			

## 5. 見守り体制

集落の見守り体制が現在どの程度機能しているのか調べるために、現在、見守りを必要とする方がいるのか、そして、見守り支援がどのような状態にあるのか質問した。

### (1) 集落における見守りを必要とする人の存在

回答者165人のうち、見守りを必要とする人が「いる」と答えたのは71.5% (118人)、「いない」と答えたのは13.9% (19人)、「わからない」と答えたのは17.0% (28人)であった。7割を超える方が「見守りを必要とする人がいる」と答えていて、見守り支援の仕組みが求められる状況にあった。

### (2) 見守りを必要とする人の状態 (複数回答)

見守りを必要とする人がいると答えた118人のうち117人から回答を得た。見守りを必要とする人の状態として「一人暮らしの高齢者」をあげる方が最も多く94人 (80.3%)いた。2番目に多いのが「身体障害のある高齢者 (47人、40.2%)」であり、3番目が「身体的な病気のある高齢者 (26人、22.2%)」、4番目が「認知症のある高齢者 (21人、17.9%)」、5番目が「精神科の病気のある高齢者 (11人、9.4%)」であった。独居高齢者への見守りが必要であるという方が多い。

### (3) 集落の見守り支援の仕組みの有無

回答者161人のうち、見守り支援の仕組みを「作っている」と答えたのは38.5% (62人)、「作っていない」と答えたのは34.8% (56人)、「知らない」と答えたのが26.7% (43人)であった。見守り支援の仕組みが作られていると認識している人は4割に満たなかった。

### (4) 見守り支援の仕組みの機能

見守り支援の仕組みを作っていると答えた62人のうち、それが「うまく機能している」と答えたのは53.2% (33人)、「うまくいっていない」と答えたのは16.1% (10人)、「わからない」と答えたのは30.6% (19人)であった。

### (5) 見守り支援の仕組みがうまく機能していない理由 (複数回答)

見守り支援がうまくいっていないと答えた10人のうち、「見守り活動に協力してくれる人がいない」をあげた方が6人で最も多かった。その他の理由では、「見守りの負担が大きい」と「対象者が見守りを望んでいない」をあげた方がそれぞれ2人いた。「見守りの仕組みがよくない」をあげた方は1人であった。

### (6) 見守り体制についての意見

全体の意見は、「日常の見守り体制はないが普段の生活の中では見守り機能は果たされている。しかし、将来を考えた場合、見守り体制を作る必要がある。災害時については見守り体制が作られ、今のところうまく機能している。しかし、若い世代が少なく昼間人口が少ないので昼間に災害があると災害時の見守り体制が機能しないという心配がある。」というものであった。年代別では、「中年後期」では「見守り体制を作る必要性があるものの老々見守りになりうまく機能しないのではという懸念とともに見守り活動があれば協力したい」という意見が出されていた。「高年前期」では「見守り体制を集落全体で作って活動をすべきである」という提案があった。

結果を年代ごとに示す。

「中年後期 (55歳～64歳)」では、集落の見守りの現状として、「結の心があるので情報伝達が早い」「行事が多く、集落の諸団体の活動が見守りになっている」という肯定的評価と、「それぞれが連絡先を決めている」「災害時の声かけはある」「(見守りの) 仕組みはないがお互いに見守りはある」「最初の頃、見まわりはあったが今はない」という記述があった。見守りの必要や要望については「災害があるので見守りは必要である」「将来見守り体制が必要である」「見守り体制を作ってもらいたい」という記述があった。課題としては、「若い人が転居して先々不安である」「若年層が少ないので見守り体制は無理」「仕組みを作っても老々見守りになる」「合併後の市職員配置により地域の把握が手薄になっている」という記述があった。また、「見守り活動は素晴らしいので、(あれば) 協力したい」という記述もあった。

②「高年前期 (65歳～74歳)」では、集落の見守りの現状として、「高齢化した地域だが声かけが行き届いて



いる」「隣同士で声かけをして助け合っている」という肯定的評価と、「昔は声かけ訪問などがあったが今は不明である」「災害時見守りはあるが、日常の見守り体制はない」という記述があった。また、「高齢者ばかりで見守る人がいなくなるので不安」という記述もあった。見守りについての提案として「民生委員などだけの見守りでなく集落全員ですべきである」「集落を10戸位の単位に分けて活動をする」「見守りの組織を作り活動計画を立て記録に残し見直すべきである」「郵便集配人の協力を得る」などの記述があった。

## 6. 災害への備え

### (1) 自分の自然災害への備えの程度

自分の自然災害への備えについて10点満点で評価してもらった。回答者154人の平均値は6.02 (SD=2.472) であり、あまり高くなかった。性×年齢の分散分析を実施したところ、性差および年齢差は見られなかった。

### (2) 集落の自然災害への備えの程度

集落の自然災害への備えについて10点満点で評価してもらった。回答者145人の平均値は5.66 (SD=2.228) であり、自分の自然災害への備えの程度よりも低かった。性×年齢の分散分析を実施したところ、有意差は見られなかった。

### (3) 災害時の緊急連絡手段（複数回答）

回答者167人のうち、全体では災害時の緊急連絡手段として「スマホを含む携帯電話を使う」と答えたのが87.4% (146人) で、「固定電話」は40.7% (68人)、「その他」が4.2% (3人) であった。緊急連絡手段としては固定電話より携帯電話をあげる方が多かった。

年代別に見ると、スマホを含む携帯電話を使うと答えたのは「中年後期」では90.5% (86人)、「後年前期」では83.3% (60人) であり、固定電話を使うと答えたのは「中年後期」では35.8% (34人)、「高年前期」では47.2% (34人) であった。相対的に「中年後期」ではスマホを含む携帯電話を使う方が多く、「高年前期」では固定電話を使う方が多いと言えよう。

### (4) 災害情報の入手先（複数回答）

回答者168人のうち、全体では「テレビ」をあげているのが85.1% (143人) で最も多かった。2番目は「集落の放送」の57.7% (97人)、3番目は「スマホを含む携帯電話」の56.5% (95人)、4番目はラジオの45.8% (77人) であった。

### (5) 車の所有

避難手段として重要な車の所有については、回答者165人のうち、「車を持っている」と答えたのは87.3% (144人)、「車を持っていない」と答えたのは12.7% (21人) であり、大方が車を持っていた。カイ二乗検定を実施したところ、年齢と車の所有の関連は見られなかった ( $\chi^2=1.785, df=1, p=.182$ )。

### (6) 家の近辺の知識、災害への備え

台風や水害などの自然災害への備えについて、「土壌・地形の知識」「家の補強」「食料の備蓄」「防災用品の備え」「避難所の決定」の程度を質問した。「土壌・地形の知識」については、近辺の土壌や地形の知識の程度を「全く知らない (1点)」から「よく知っている (4点)」まで、「家の補強」「食料の備蓄」「防災用品の備え」「避難所の決定」などの災害への各種備えの程度については「全くしていない (1点)」から「十分にしている (4点)」までの4段階で答えてもらった。

災害への備えの程度を図1に示す。「土壌・地形の知識」は少し知っている程度 ( $M=3.1, SD=0.94$ )、「避難所の決定」はある程度決めている程度 ( $M=3.1, SD=0.78$ ) であった。「家の補強」は少し補強しているに近かった ( $M=2.8, SD=0.98$ )。一方、「食料の備蓄 ( $M=2.2, SD=0.82$ )」と「防災用品の備蓄 ( $M=2.5, SD=0.79$ )」はあまりしていないに近かった。

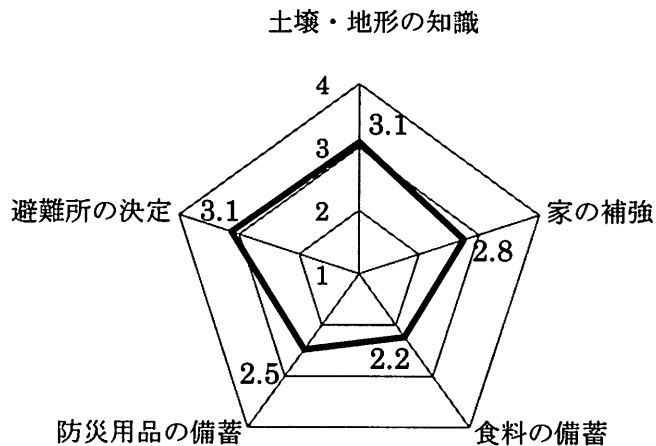


図1 災害への備え

また、災害への備えの程度の性差と年齢差を見るために、分散分析を行った(表2)。結果、「土壌・地形の知識」に関して男性が女性よりも知識が深かった ( $F(1,161)=11.56, p<.01$ )。「家の補強」については、年齢の主効果と性×年齢の交互作用が有意であり(主効果 $F(1,156)=5.36, p<.05$ ；交互作用 $F(1,156)=5.36, p<.05$ )、男性の高年前期が中年後期よりも家の補強をする程度が高かった。また、「食料の備蓄」について、女性の方が男性よりも備蓄をする傾向が見られた ( $p<.10$ )。「防災用品の備蓄」と「避難所の決定」について、有意差は見られなかった。

表2 台風や水害などの自然災害への備え

			平均値	標準偏差	主効果	交互作用
あなたは家の近辺の土壌や地形の性質を知っていますか。(土壌や地形の知識)	性	男性	3.3	.954	$p<.01$ 男性>女性	n.s.
		女性	2.8	.877		
	年齢	中年後期	3.0	.944	n.s.	
		高年前期	3.1	.950		
あなたは災害に備えて家の補強をしていますか。(家の補強)	性	男性	2.7	.938	n.s.	$p<.05$ 男性の中年後期が低い
		女性	2.7	1.047		
	年齢	中年後期	2.6	1.013	$p<.05$ 中年後期<高年前期	
		高年前期	2.9	.922		
あなたは食料品の災害用備蓄をしていますか。(食料の備蓄)	性	男性	2.1	.832	$p<.10$ 男性<女性	n.s.
		女性	2.4	.780		
	年齢	中年後期	2.2	.782	n.s.	
		高年前期	2.3	.861		
あなたは防災用品の備えをしていますか。(防災用品の備蓄)	性	男性	2.5	.784	n.s.	n.s.
		女性	2.5	.796		
	年齢	中年後期	2.4	.799	n.s.	
		高年前期	2.6	.767		
あなたは避難所を決めていますか。(避難所の決定)	性	男性	3.1	.794	n.s.	n.s.
		女性	3.1	.789		
	年齢	中年後期	3.1	.789	n.s.	
		高年前期	3.2	.793		

(7) 避難の手助けの必要性と要援護者の存在

① 避難の手助けの必要性

回答者が避難の手助けをどの程度必要としているか調べるために、「あなたは避難所に行くのに近隣の手助けを必要としますか。」と質問した。

回答者168人のうち、「非常に必要である」と答えたのは6.0% (10人)、「少しは必要である」は12.5% (21人)、「あまり必要ではない」は29.2% (49人)、「全く必要ではない」は52.4% (88人)であった。避難の手助けが必要と答えたのは2割以下であった。なお、回答に年代差は見られなかった。

## ②自力で避難できない人の多さ

集落に自力で避難できない人がどれくらいいるか質問した。回答者159人のうち、「非常にたくさんいる」と答えたのは19.5% (31人)、「少しいる」と答えたのは71.7% (114人)、「あまりいない」と答えたのは8.2% (13人)、「全くいない」と答えたのは0.6% (1人)であった。「たくさんいる」と「少しいる」を合わせた9割を超える方が手助けを必要とする方がいると答えていた。なお、回答に年代差は見られなかった。

## (8) 集落の自然災害への備えについての意見 (自由記述)

全体では、「防災組織等がありうまく機能している」という肯定的評価が見られたが、高齢になると「災害時の見守り」への要望があった。課題としては「避難路や避難所の確保」と「備蓄の充実」が多くあげられていた。「水害対策」への要望も多く見られた。その他、「避難訓練」や「防災情報提供」に関する要望もあった。結果を年代ごとに示す。

①「中年後期 (55歳～64歳)」では、42件の記述があり、「水害対策」に関するものが11件、「避難所」に関するものが8件、「情報伝達」に関するものが6件、「避難訓練」に関するものが5件、「防災備蓄」に関するものが4件、「高齢者」と「集落のまとまり」に関するものがそれぞれ2件あった。

「水害対策」については「堤防が低く波が越えてくる」という不安、「水路の整備や川底のしゅんせつ」「堤防の整備」「水没対策」などの要望・課題があった。「避難所」については「高台に避難所がほしい」「避難所が水害にあうので屋上への階段を設置してほしい」という要望や「避難所が遠い」という課題があった。「情報伝達」については「防災放送が聞こえにくい」「携帯電話が届かないところがある」という課題があった。「避難訓練」については「避難訓練を定期的に行ってほしい」という要望や「福祉施設との共同訓練が必要」「避難訓練が形式的である」という課題があった。「防災備蓄」については「食料や備品の備蓄が必要」という意見があった。その他「高齢者」については「高齢者が多いので避難が大変、日常の声かけが必要」という意見、「集落のまとまり」については「会合を多くして集落のまとまりを作ってほしい」という要望があった。

②「高年前期 (65歳～74歳)」では、35件の記述のうち、「水害対策」に関するものが10件、「避難所 (路)」に関するものが8件、「情報伝達」に関するものが6件、「防災対策」に関するものが6件、「避難訓練」「防災備蓄」「気象情報の学習」に関するものがそれぞれ1件あった。

「水害対策」については「居住地が低地にある」という心配、「水路や道路の排水」「川底のしゅんせつ」「堤防を高くする」などの要望があった。「避難所 (路)」については「避難所が低地にある」「避難路が冠水する」「避難路が1本しかない」という課題と「ホテル形式の避難所が必要」という要望があった。「情報伝達」については「防災放送が聞こえにくい」「停電時の連絡不通が心配」という課題があった。「防災対策」については「災害への備えが不十分」「新住民の防災意識が低い」という課題があった。その他、「避難訓練」については「全員参加ではなく真剣さが足りない」という指摘、「防災備蓄」については「モーターボートや発電機の備蓄」の要望、「気象情報の学習」では「子供を含めて気象についての学習の場を作ってほしい」という要望があった。

## 7. 医療体制

### (1) 緊急の医療機関利用

ここ1年の間に緊急で医療機関を利用した方は11.2% (18人)であった。年齢が上がるにつれ緊急で医療機関を利用する人がわずかではあるが増える傾向がみられた ( $\chi^2=3.170, df=1, p=.075$ )。

### (2) 緊急受診の理由 (複数回答)

緊急で医療機関を利用した理由を調べるために「あなたはどのような症状で緊急に受診しましたか。(〇はいくつでも)」と複数回答で質問した。

緊急で医療機関を利用したと答えた18人のうち18人から回答を得た。「その他」を除いて、最も多いのが「発熱」の6人、その次に多いのが「外傷」の5人、3番目が「下痢」と「皮膚症状」の3人であった。

### (3) 医療機関の選択理由（複数回答）

緊急で医療機関を利用したと答えた18人のうち17人から医療機関の選択理由について答えてもらった。最も多いのが「かかりつけだから」の11人で、2番目に多いのが「家から近い」「いつでも診療してもらえる」「入院・検査設備が充実している」の5人であった。

### (4) 地域の緊急医療機関の受入体制への満足度と不満の理由（複数回答）

全体では「満足している」が33.8% (49人)、「やや満足している」が56.6% (82人)、「不満である」が9.7% (14人)であった。「満足している」と「やや満足している」を合わせると90.4%になりほとんどの方が地域の緊急医療機関の受け入れ体制に満足していた。

緊急医療体制に「不満」と答えた方のうち10人から不満理由が述べられた。最も多い不満が「緊急医療機関まで遠くて時間がかかる」というもので5件あった。その他「町内に緊急医療機関がない」「地域にある診療所は休日は閉まっている」「交通の便が悪い」などの理由があった。不満の主なものは、緊急医療機関が近くにならないことであった。

### (5) 地域の医療体制への意見（自由記述）

全体では、地域の医療体制への肯定的評価がある一方で、不満や要望も多く見られた。町内に診療所があり医療体制としては良いという評価があるが、緊急時への不安や専門医がいないことと通院の不便さに不満があった。

結果を年代ごとに示す。

①中年後期（55歳～64歳）では、29件の記述のうち、「医療体制」に関するものが14件、「診療所」に関するものが10件、「医師」に関するものが2件、「その他」が3件あった。

「医療体制」に関しては、「30分以内で緊急搬送ができるので医療体制としては良い」という満足、「夜間の緊急診療に不安」という不安、「通院が不便」「近くに専門の医師がいない」という不満、「本土との医療技術の格差縮小してほしい」という要望があった。「診療所」については「近くにあって助かっている」「往診をしてくれて心強い」「診療所の医師が信頼できる」という満足の意見があった。「医師」については「病院の医師の対応が悪い」という不満もあった。

②「高年前期（65歳～74歳）」では、22件の記述のうち、「医療体制」に関するものが9件、「診療所」に関するものが9件、「県立病院」に関するものが2件、「医師」に関するもの1件あった。

「医療体制」については「医療体制は向上して現状で良い」という満足、「専門医の診察を受けるには名瀬まで行くので時間がかかる」「少し不便」という不満の意見があった。「診療所」については「近くにあっても対応してくれる」という満足、「両施設の充実面が弱い」という課題があった。「県立病院」については「検査に時間がかかる」「医師の転勤が多い」という不満があった。

## 8. 地域の問題について（複数回答）

表3に示すように、全体では、地域の問題で最も多いのは「日常の買い物に不便である（66.1%）」で、2番目が「台風など自然災害に弱い（55.8%）」、3番目が「交際にお金がかかる（47.9%）」、4番目が「一人暮らしや高齢者など老後生活に不安がある（44.8%）」と「人口が減って集落や地域の維持が困難になっている（44.8%）」、6番目が「ハブがあるので困る（40.0%）」であった。買い物、交際費、老後生活、人口減少などの社会的課題と自然災害とハブなどの自然的課題の2つが地域の重要な問題となっている。

年代による違いが大きいのは「交際にお金がかかる」で、中年後期は42.6%で6位、後年前期は54.9%で2位であり、高年者の方が問題に感じていた。これは高齢になると収入が下がるので交際費への支出を問題に感じるようになるからと考えられる。同様に、「一人暮らし高齢者など老後生活に不安がある」では、中年後期は50.0%で3位、高年前期は38.0%で5位であり、老後への不安は中年世代が強かった。これは若い世代が少ない

という人口構成があるので、今の高齢者は自分たちが見守ることができるだろうが、自分たちが高齢者になったとき自分たちを見守る世代がないのではないかという不安を反映していると思われる。

表3 地域で感じている問題（複数回答）

	中年後期	高年前期	合計
1. 日常の買い物に不便である	① 66.0%	① 66.2%	① 66.1%
2. 医院や病院への通院で、足の確保が困難である	29.8%	16.9%	24.2%
3. 急病のときの医療体制が不十分である	19.1%	15.5%	17.6%
4. 福祉のサービスが不十分である	9.6%	12.7%	10.9%
5. バスや定期船など交通機関が充実していない	17.0%	9.9%	13.9%
6. 近隣道路が整備されていない	5.3%	5.6%	5.5%
7. 集会施設、商店など公共的建物が高齢者には使いにくい	14.9%	16.9%	15.8%
8. 台風など自然災害に弱い	② 59.6%	③ 50.7%	② 55.8%
9. ハブがあるので困る	⑤ 43.6%	⑥ 35.2%	⑥ 40.0%
10. 一人暮らし高齢者など老後生活に不安がある	③ 50.0%	⑤ 38.0%	④ 44.8%
11. 趣味や習い事などの学習機会が少ない	12.8%	9.9%	11.5%
12. 老後の時間をもてあましている	4.3%	4.2%	4.2%
13. 子育てに不便である	19.1%	7.0%	13.9%
14. 交際にお金がかかる	⑥ 42.6%	② 54.9%	③ 47.9%
15. 人口が減って集落や地域の維持が困難になっている	④ 47.9%	④ 40.8%	④ 44.8%
16. その他	5.3%	5.6%	5.5%
17. 何も問題を感じていない	6.4%	7.0%	6.7%
回答者数	94	71	165

## 9. 行政や福祉への意見（自由記述）

全体では、比較的多い記述として、「市職員」への不満、「人口減少」への懸念と要望があった。その他「中年後期」では「行政」「災害対応」「住宅」「移動」「情報伝達」「集落の活性化」「道路の整備」「少子化と学校の存続」などの意見があった。また「高年前期」では「行政」「道路の整備」「買い物」「地域づくり」「年金」「情報伝達」などの意見があった。

結果を年代ごとに示す。

①「中年後期（55歳～64歳）」では、42件の記述のうち、「若い世代の流出」に関するものが5件、「市職員」「行政」「災害対応」に関するものがそれぞれ4件、「住宅」「移動」「情報伝達」「集落の活性化」に関するものがそれぞれ3件、「道路の整備」「少子化と学校の存続」がそれぞれ2件、「その他」が7件あった。

「若い世代の流出」については「若い世代が流出し集落行事等の継承が心配である」という懸念と「若い世代に出会いの場や働ける場がほしい」という要望があった。

「市職員」については「集落行事への市職員の参加が少ない」「市職員の対応が悪い」という不満があった。「行政」については「住民の声をちゃんと聞いてほしい」「説明会や連絡を十分にしてほしい」という要望があった。「災害対応」については「高齢化で災害対策が心配である」「災害対応が遅い」「災害の際に不公平な取り扱いがあった」という不安・不満と「河川や水路を整備してほしい」という要望があった。

「住宅」については「市営住宅の下水道の整備がされていない」という不満と「市職員は住宅を見まわった方がいい」「集落に住宅がほしい」という要望があった。「移動」については「病院が遠い」ことへの不安と「福祉タクシーの基準緩和」「福祉バスの巡回」への要望があった。「情報伝達」については「防災放送が聞こえにくい」という不満と「屋内受信機の整備と難聴地域の解消」への要望があった。「集落の活性化」については「囑託員がリーダーシップを取ってもらいたい」「集落の活気がなくなってきているので何とか活性化したい」という要望と「健康教室を定期的で開催すればシマに誇りを持てるようになる」という提案があった。

「道路の整備」については「舗装と歩道の整備」の要望があった。「少子化と学校の存続」については「少子化で学校の存続が困難になってくる」「学校がなくなるとUターンやIターン者も来なくなり限界集落になる」

という意見があった。

「その他」については「学童保育ができて安心」という満足、「野外での交流場所や機会が少ない」という不満、「高齢者の交流の場がほしい」「大学があればいい」「このようなアンケートを若者にもしてほしい」という要望があった。

②「高年前期（64歳～74歳）」では、36件の記述のうち、「市職員」「人口減少」に関するものがそれぞれ6件、「行政」に関するものが3件、「道路の整備」「買い物」「地域づくり」「年金」「情報伝達」に関するものがそれぞれ2件、「その他」が11件あった。

「市職員」については「市職員の社会参加が少なく集落行事を嫌って名瀬に家を建てる」「市職員の対応や仕事ぶりがよくない」という不満があった。「人口減少」については「人口減少に歯止めがかからない」「少子高齢化と若い世代の流出過疎が進行している」「若者が住める地域づくりが必要」という指摘があった。

「行政」については「行政への問題はない」「新庁舎の必要性を期待する」という意見と「すぐやる課を作してほしい」という要望があった。

「道路の整備」については「道路の補修の対応が遅い」という指摘「道路の舗装をしてほしい」という要望があった。「買い物」については「店がなく不便である」という不満があった。「地域づくり」については「村おこしや地域づくりに取り組めないか」「住民の協力体制ができれば地域も活性化するのではないか」という提案があった。「年金」については「年金が少ない」「厚生年金に税金はおかしい」という不満があった。「情報伝達」については「防災放送が聞こえにくい」という不満と「電波の入らないところをなくしてほしい」という要望があった。

「その他」については「合併効果の検証をしてほしい」「見守りネットワークを充実してほしい」「カラオケなど年寄りの楽しみを作ってほしい」「イノシシ対策をしてほしい」「集落で習い事ができるといい」「高齢者への低利借入方法を教えてほしい」などの要望と「アンケートの質問事項からは地域の改善に役立ちそうにない感じを受けた」というアンケートへの批判があった。

## まとめにかえて

本稿は、2014（平成26）年1月から3月にかけて奄美市住用町の中高年者を対象に実施した調査結果を集計したものである。調査対象者は奄美市住用町に居住する55歳以上74歳以下の476人で、回答者数は175人（回収率36.8%）であった。調査内容は普段の生活状況、見守り体制、災害への備え、医療体制、地域の課題などであった。

### 1. 回答者の属性

性と年齢の両方の質問に回答した方は169人であり、男女ほぼ同数であった。年代別では、55歳から64歳の「中年後期」の方が65歳から74歳の「高年前期」よりやや多かった。健康状態では、健康な方の割合が多く、これに年齢による違いは見られなかった。世帯状況では、「中年後期」は「高年前期」よりも「一人暮らし」が多かった。一方、「高年前期」は「中年後期」よりも「夫婦のみ」と「子供との同居（二世帯同居）」が多かった。世帯の主な収入では、「中年後期」は「常勤の仕事の収入」と「年金など」が多く、「高年後期」では「年金など」がほとんどであった。

## 2. 近隣交流の変化

近隣の交流は少し減ってきていた。これに性差や年代差は見られなかった。

## 3. 地域への愛着度

地域への愛着度は高かった。性差や年代差は見られなかったが、住用町内での居住期間が長い人ほど、また住用町外での居住期間が短い人ほど地域への愛着が強かった。

## 4. 社会関連性指標

身近な人との交流については、家族・親戚および家族・親戚以外の方とも話を頻繁にしていた。誰かを訪ね合う機会は週2度くらいであった。訪ね合う機会は「中年前期」の男性が少ない傾向にあった。

近所づき合いの程度は立ち話程度であった。女性の方が男性よりも深い近所づき合いをしていた。

相談に乗ってくれる方や緊急時に手助けをしてくれる方は「時々いる」と「いつもいる」の中間ぐらいだった。相談については、女性の方が男性よりも相談に乗ってくれる人が多かった。緊急時の手助けについて、性差は見られなかった。

職業や家事などの役割はある程度持っていて、女性の方が男性よりも役割があると答えていた。健康への配慮と規則的な生活はまあまあであった。規則的な生活については「高年前期」の方が「中年後期」よりも規則的な生活を送っていた。

テレビをほぼ毎日見て、新聞をほぼ毎日読んでいた。本・雑誌を読むのは週1度くらいに近かった。公民館活動に参加する機会は月に1度に満たない程度で少なかった。趣味は全体としてはまあまあ楽しんでいた。ビデオなどの便利な道具は少し利用していた。ビデオなどの利用に関して、女性の場合、「高年前期」の方が「中年後期」よりも利用が少ない傾向があった。

生活の工夫、積極性、社会への貢献についてはまあまあというところであった。生活の工夫と積極性に関して、「中年後期」では女性の方が男性よりも生活の仕方を自分なりに工夫したり、積極的な取り組みをしていた。社会への貢献については、「中年後期」の方が「高年前期」よりも社会に役立つことができるという見通しを持っていた。

## 5. 見守り体制

7割の方が「見守りを必要とする人がいる」と答えていて、見守り支援の仕組みが求められる状況にあった。見守りを必要とする人は「一人暮らしの高齢者」が最も多く、次いで「身体障害のある高齢者」が多かった。見守りが機能していない理由は、「見守り活動に協力してくれる人がいない」であった。

また、現在見守り体制はないが自然な形での見守りがなされている状況にあった。しかし、将来を考えた場合、見守り体制を作る必要がある。災害時には見守り体制が作られて、今のところうまく機能しているが、若い世代が少なく昼間人口が少ないので昼間の災害では機能しないという心配がある、という意見があった。

## 6. 災害への備え

自分の自然災害への備えはあまり高くなかった。さらに集落の自然災害への備えは自分の備えの程度より低かった。

災害時の緊急連絡手段は全体ではスマホを含む携帯電話が多かったが、相対的に「中年後期」はスマホを使う人が多く、「高年前期」は固定電話を利用する人が多かった。災害情報の入手先はテレビが多く、次いで集落放送、スマホを含む携帯電話、ラジオが続いた。また、車はほとんどの方が所有していた。

災害への備えについて、「土壌・地形の知識」は少し知っている程度、「避難所の決定」はある程度決めている程度であった。一方、「食料の備蓄」と「防災用品の備蓄」はあまりしていないに近かった。「家の補強」は

少ししている程度に近かった。これについては、「高年前期」の方が「中年後期」よりも家の補強をしていた。避難の手助けの必要について、2割近くが避難の手助けが必要と答えていた。自力で避難できない人がどの程度いるかについては、9割を超える人が手助けを必要とする方がいると答えていた。

防災について、防災組織等がありうまく機能しているという肯定的評価が見られたが、高齢者からは災害時の見守りへの要望があった。課題としては避難路や避難所の確保と備蓄の充実が多くあげられていた。水害への対策要望も多く見られた。その他、避難訓練や防災情報提供に関する要望もあった。

## 7. 医療体制

緊急で医療機関を利用した方は11.2%であった。年齢が上がるにつれ緊急で医療機関を利用する人がわずかではあるが増えていた。地域の緊急医療機関の受入体制については9割が満足していた。緊急医療体制への不満の主な理由は、「緊急医療機関まで遠くて時間がかかる」であった。

全体では、地域の医療体制への肯定的評価がある一方で、不満や要望も多く見られた。町内に診療所があり医療体制としては良いという評価があるが、緊急時への不安や専門医がいないことと通院の不便さに不満があった。

## 8. 地域の問題

地域の問題で多かったのは、買い物や交際費や老後生活などの社会的課題と台風やハブなどの自然的課題の2つであった。

## 9. 行政や福祉について

行政や福祉について、比較的多い意見として、市職員への不満、人口減少への懸念があった。その他、行政、災害対応、住宅、情報伝達、道路の整備、地域づくり、買い物などについて意見があった。また、本アンケートについても賛否の意見があった。

謝辞 本調査にご回答いただいた住用町の住民の皆様、調査実施にご協力いただいた奄美市役所および住用総合支所の皆様に感謝申し上げます。

付記 本研究はJSPS科研費23330190の助成を受けた。

## 文献

奄美市 (2015). 「平成22 (2010) 年10月奄美豪雨災害の検証 (記録誌)」 (<https://www.city.amami.lg.jp/somu/bosai/bosai/documents/kiroku.pdf> : 2016. 5.11)

奄美市HP (2016). 「奄美市の人口 (住民登録月報:平成28年3月31日現在)」 (<https://www.city.amami.lg.jp/shimin/shise/toke/jinko/index.html> : 2016. 4.25)

安梅勅江 (2000). エイジングのケア科学-ケア実践に生かす社会関連性指標- 川島書店

住用村誌編集委員会 (2005). 「わきゃシマぬあゆみ -住用村の歴史と暮らし- 第1集」 住用村誌編集委員会



# Social Interaction, Supporting System, Disaster Prevention Measures, and Medical System of Island Villages

: A survey of the middle-aged and elderly persons living in Sumiyo Town of Amami City

Teruyoshi Kokubo, Fusako Iwasaki, Asako Oyama,  
Yasuhira Tanaka, Yoichi Tabata, Tadao Takayama

The purpose of the study was to assess the present state of the social interaction, the supporting system, the disaster prevention measures, and the medical system in Sumiyo Town of Amami City. A questionnaire was personally mailed to 476 residents of 55 to 74-year-old and later returned. The number of people who responded to the questionnaire was 175 and the rate of collection was 36.8%.

The respondents to this survey were mostly couple households and their income was mainly a pension. Neighborhood interaction decreased a little. An attachment to the local community was strong. Social interaction of women (e.g. contact with family member, relations with neighbors, having counsel, and having active role) was stronger than men. Although there were spontaneous watch over activities in a natural way, the respondents hoped to have a supporting system for them. The voluntary organizations for disaster prevention were well functioned, but there were issues of making a safe shelter and establishing flood-control measures. With respect to the medical system, there was a satisfaction with the community clinic, but on the other hand, there remained demands for an emergency medical system and a specialized medical service. There were also social and natural problems that the shopping was inconvenient, the town was prone to natural disasters, and so on.

**Key Words:** Island villages, Social interaction, Supporting system, Disaster prevention measures, Medical system